

(2) 小坂町・川上地区

① 取組内容と実施スケジュール

モデル自治体・地区では人口分析・推計に加えて現地調査・ヒアリング、2回のワークショップ、市町報告会を実施した。以下が実施概要である。

■現地調査・ヒアリング

・町役場担当者へのヒアリング

日時 2021年7月16日(金) 10:00-11:30

場所 小坂町役場

対象 総務課4名、教育委員会学習振興班1名

・対象地区住民代表へのヒアリングおよび現地調査

日時 2021年7月16日(金) 13:00-17:00

場所 川上公民館および川上地区各所

対象 川上地区自治会連絡協議会会長1名、副会長2名、事務局長(川上公民館館長)1名(以上4名は濁川・砂子沢・余路米・野口自治会の会長)

■ワークショップ(1回目)

日時 2021年11月6日(土) 13:30-15:30

場所 川上公民館

参加 21名

■ワークショップ(2回目)

日時 2021年12月5日(日) 13:30-15:30

場所 川上公民館

参加 18名

■小坂町報告会

日時 2022年1月15日(土) 13:30-15:30

場所 小坂町交流センター セパーム

参加 69名

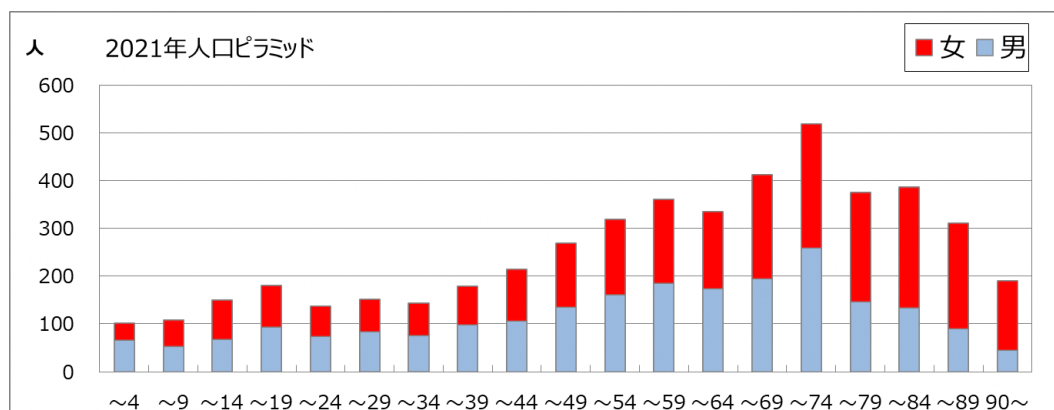
② 人口分析・推計（小坂町全体）

委託機関が構築した人口推計シミュレーションプログラムを用いて小坂町全体での人口の現状分析、パターン別人口推計シミュレーションを行った。

1）現状分析（2016～2021 年）

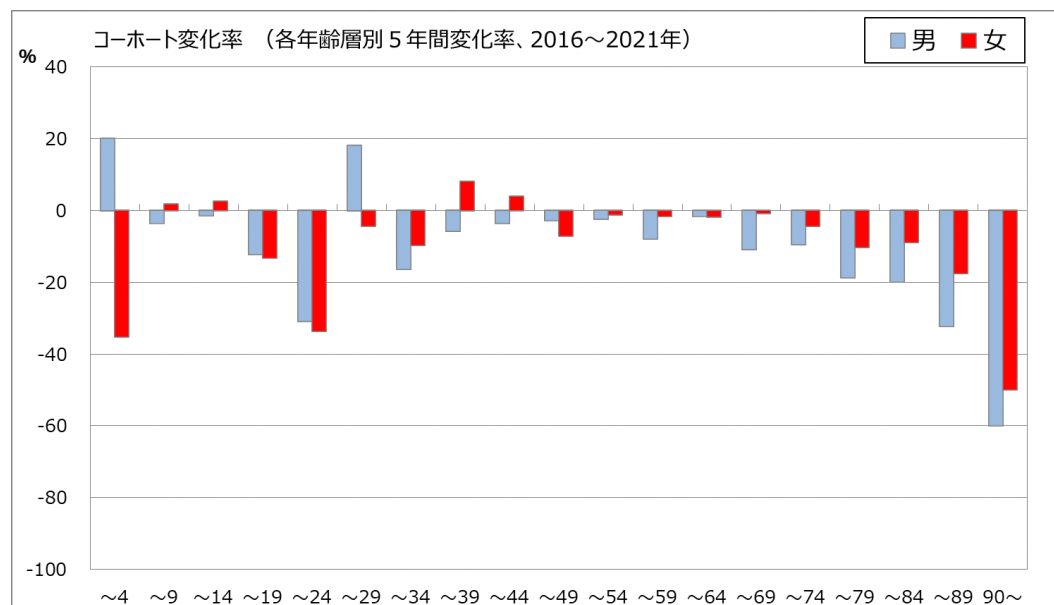
小坂町全体の人口構成、過去 5 年間（2016～2021 年）の人口動態の推移を示す。

i. 年代別人口構成



人口 4,829 人の内、70 代前半が最多の 518 人、次いで 60 代後半が 411 人となっている。最も少ないのは 0～4 歳の 101 人で最多の 70 代前半の 20%に満たない人数となっている。

ii. 年代別コーホート変化率



これは 2016 年から 2021 年の 5 年間の各年代における人口増減を変化率で示したもので

ある。例えばこの図で示される「～19」は「15～19 歳」の 10 代後半のことで、数値はこの年代の 2016 年時点の「10～14 歳」の人口と比較してどの程度の増減（主に社会増減）をしているかを表している（0～4 歳のみ 5 年前の比較が出来ないので各時点での人数を比較）。また、高齢年代の減少の多くは自然減である。

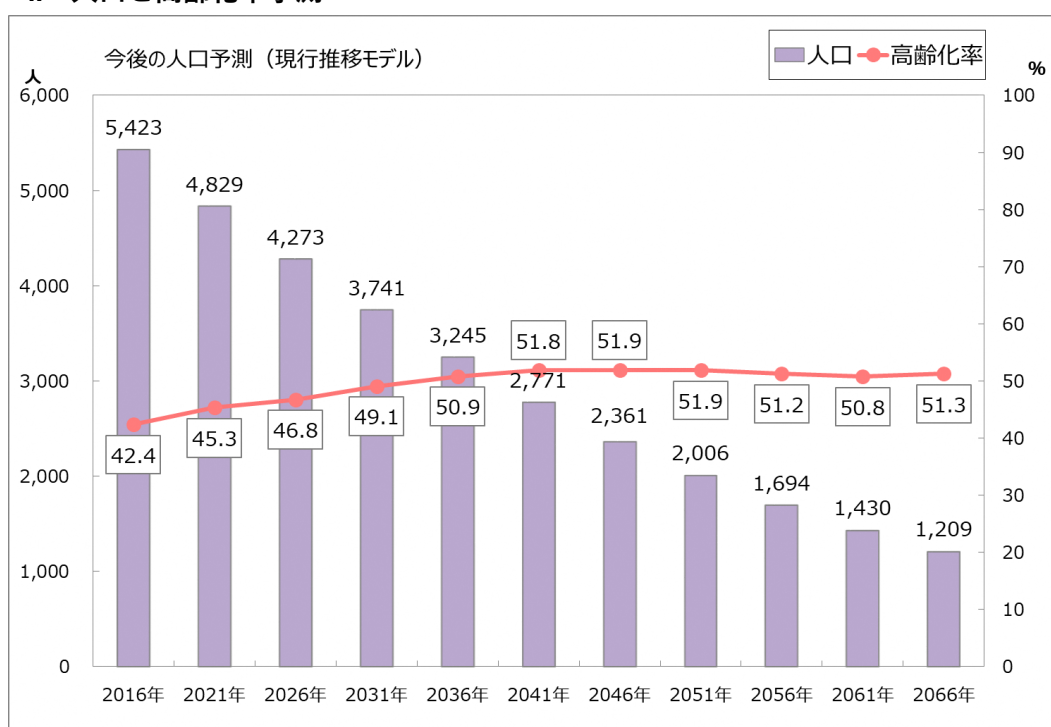
小坂町では 0～4 歳男性、5～9 歳女性、10 代前半女性、20 代後半男性、30 代後半女性、40 代前半女性に増加が見られる。特に 0～4 歳男性は 20.0 %（11 人）、20 代後半男性 18.1 %（13 人）と大幅な増加となっている。また、30 代後半～40 代前半女性も実数にして計 10 名の増加となっている。10 代後半～20 代前半の減少（流出）には男女差はないが、増加が見られる年代層には性別に何らかの関連が見られる。

一部の年代の男性人口の増加は大変すばらしいものの、10 代後半～20 代前半人口の大幅な減少分を取り戻すことは出来ていない。

2) 現状推移シナリオ

過去 5 年間（2016～2021 年）の人口動態が今後も続いた場合の人口推移を検討する。

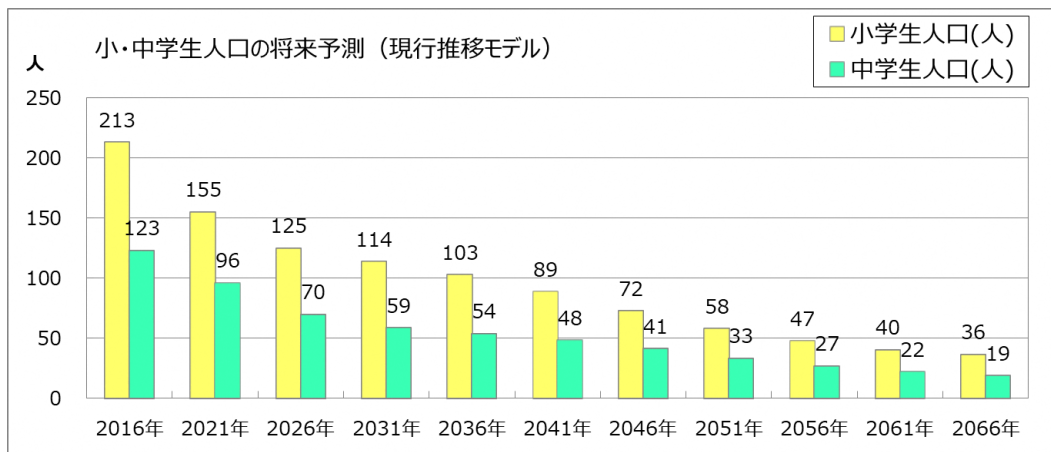
i. 人口と高齢化率予測



過去 5 年間の減少傾向がこのまま続いた場合、人口は 2021 年比で 20 年後の 2041 年には 57.4%、45 年後の 2066 年には 25.0%まで減少すると推計されている。高齢化率は緩やかな上昇後、51%前後で頭打ちになると推計されている。これは直近の 5 年間で高齢化率を引き下げる 0～4 歳男性と 20 代後半男性が比較的高い増加率を示した傾向が反映された結果である。高齢者は一定の年齢で自然減としてカウントされ人口総数自体は縮小していく中で、若い年代の若干の増加傾向と高齢者との割合が 51%程度のところで均衡すると

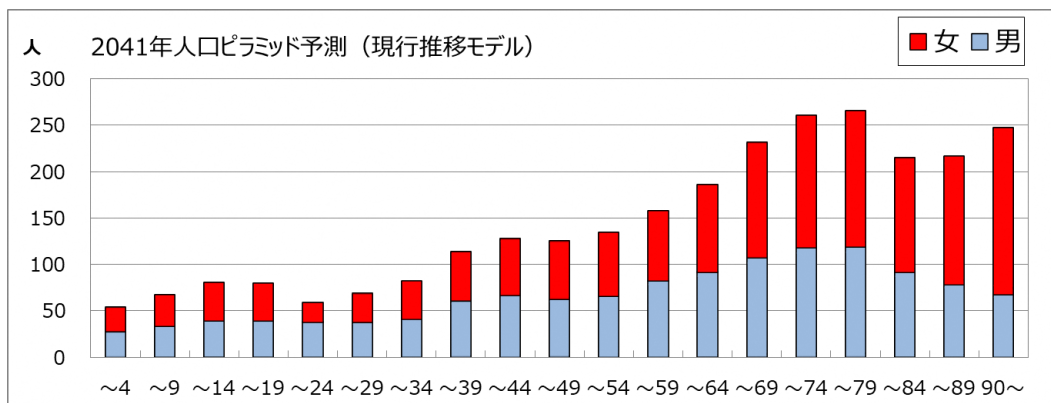
いうことである。0～4歳男性と20代後半男性の増加傾向が仮に無かった場合、高齢化率の予測は相当な上昇傾向を示したものと思われる。

ii. 小・中学生数予測



過去5年間の出生数や社会増減を基に予測する限り、小・中学生数も相当な減少となる。2021年比で20年後の2041年には54.6%、45年後の2066年には21.9%となり、人口総数を上回るほどの減少率になると推計されている。

iii. 2041年（20年後）の年代別人口構成



20年後の全人口は2,771人と推計され、最も多い年代は70代後半の265人、最も少ない年代は0～4歳の53人となっている。20代前半～30代前半の人口が少なく、特に20代の女性割合が低いことを勘案すると、この時点よりさらにその先の人口構成は一層、厳しいものと予測される。

3) 人口安定化シナリオ

人口安定化シナリオは合計特殊出生率、10代後半の流出率、定住増加数の3つの要素を組み合わせて検討する。人口の安定化には出生率と10代後半の流出率を改善させ、過去の若年層の人口流出を補うように、20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代のバランスのとれた定住を増加させることが望ましいと思われる。

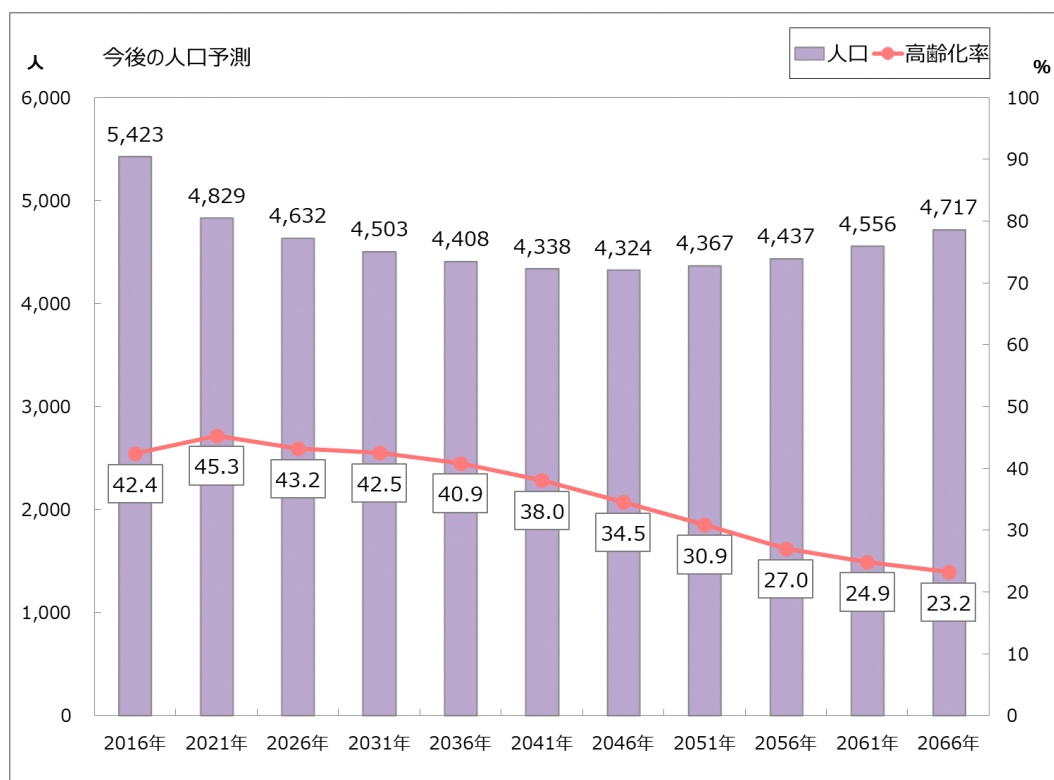
今回の組み合わせでは、出生率は2016年に策定された小坂町人口ビジョンの推計に準じて2041年には1.94、2046年以降は2.07へと段階的に上昇させる設定とした。10代後半の流出率は現状の半分となるように設定した（詳細は参考資料に記載）。10代後半の流出率を半分に抑制するという仮定は現実には多くの困難が予想される。しかしながら、この部分を具体的に検討する端緒となることを期待しこの設定とした。定住増加数の対象は20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代として毎年各8.3組、58.1人（小坂町の2021年人口の1.20%）の誘致数とした。以上の条件設定で、出生率、流出率、定住増加数の3要素を組み合わせた人口安定化シナリオを検討する（下表参照）。

表 人口安定化シナリオの設定数値

合計特殊出生率（％）		10代後半流出率（％）		定住増加数・率/年		
2021～2026年	1.52		現状	設定値	各世代（世帯）	8.3
2026～2031年	1.63	男性	31	15	合計世帯数（世帯）	24.9
2031～2036年	1.73	女性	34	17	合計人数（人）	58.1
2036～2041年	1.83				2021年人口比（％）	1.20
2041～2046年	1.94					
2046年以降	2.07					

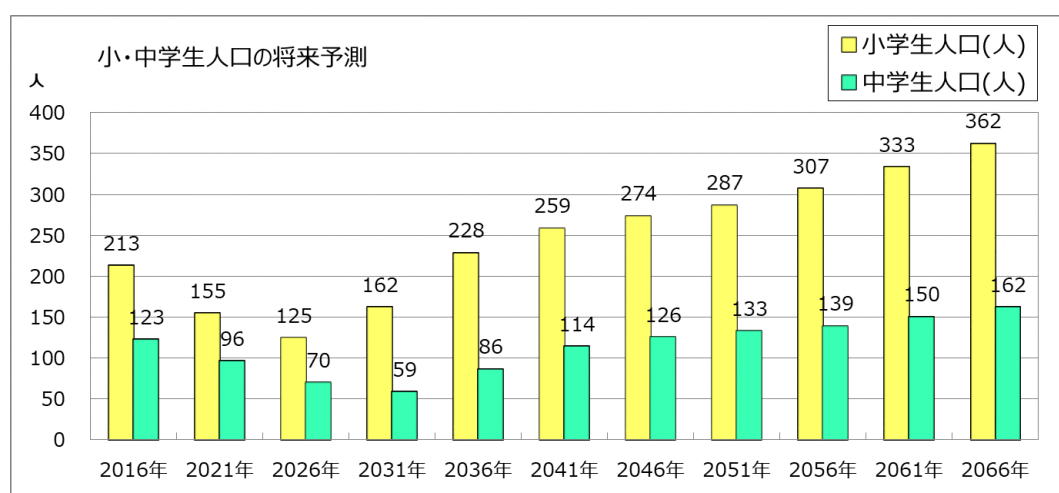
注：20代前半夫婦は1組（世帯）2人、30代前半子連れ夫婦は1組（世帯）3人、60代前半夫婦は1組（世帯）2人と設定。

i. 人口と高齢化予測



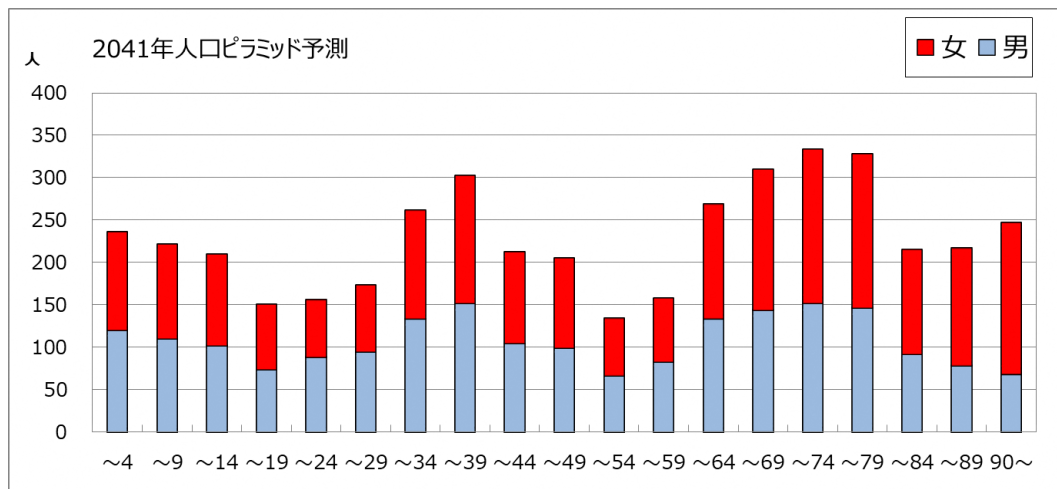
2021年人口の1.20%に相当する人数を毎年、呼び込むことが出来れば、人口総数、高齢化率ともに長期にわたり安定化が達成される。

ii. 小・中学生数予測



小・中学生数は、2031年頃からは増加に転じる。2036年には現在の小・中学生数を60人ほど上回るまで回復すると推計された。次頁に示す人口ピラミッドはこの年代層の取り戻しがあって初めて安定的な状態を示すものである。

iii. 2041 年（20 年後）の年代別人口構成



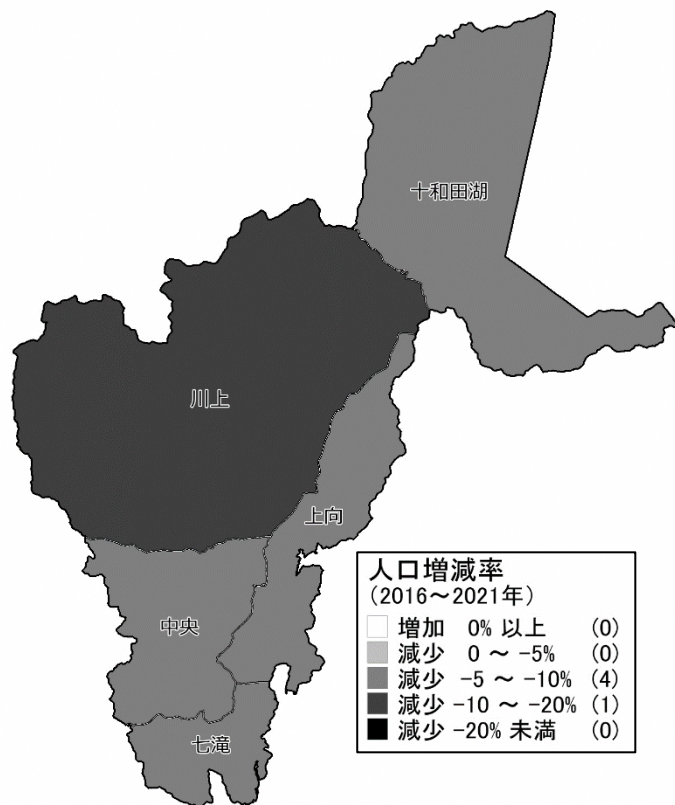
60 代後半～70 代にかけてピークがある。加えて 30 代とその子ども世代である 10 代後半未満の年代層にもピークが確認出来る。若い世代の人口が着実に維持・増加に向かう人口構成になることが推計される。

③ 人口分析・推計（小坂町内全地区）

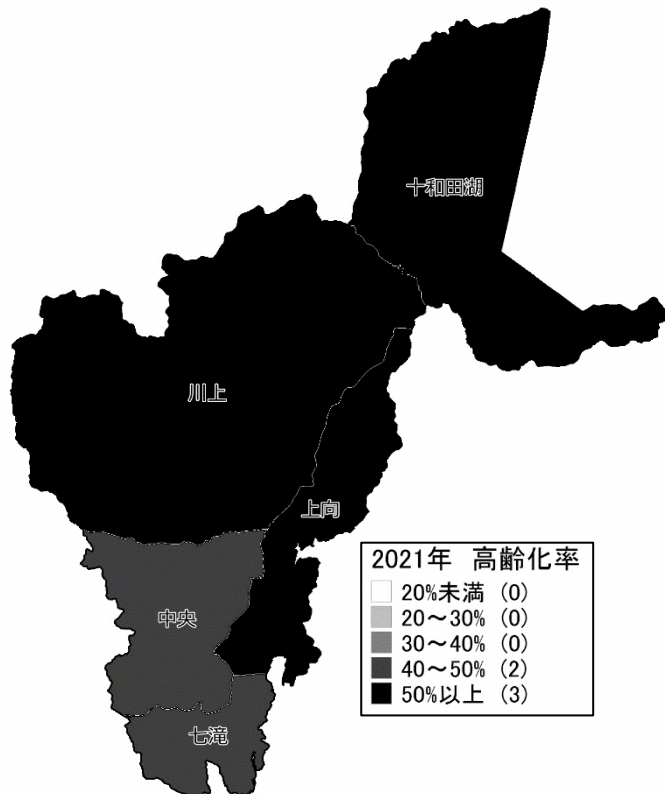
次に小坂町内全地区における人口分析・推計結果を掲載する。他の自治体では 2016～2021 年の地区別コーホート変化率を一覧表で表示しているが、小坂町では住民基本台帳による 2016 年 4 月 30 日現在の地区別人口データの取得が困難であった。そのため分析が行えず掲載をしないこととする。しかし、2018 年 4 月 30 日現在の地区別人口データと小坂町全体の変化率を代替し推計可能であった項目の主だった分析・推計結果については図として表示する。図示した分析項目は人口増減率（2016～2021 年）、高齢化率（2021 年）、4 歳以下増減率（2016～2021 年）、小学生増減率（2016～2021 年）、人口増減率予測（2021～2051 年）、2051 年に人口安定化を達成するために必要な毎年の定住増加率（2021 年人口比％）である。この分析・推計結果を町内全地区が表示された地図上に表現した。結果の評価については良い場合は淡色、思わしくない場合は濃色（白色～黒色）になるように段階的に表示している。

なお、「⑤人口分析・推計（小坂町川上地区）」では国勢調査の 2015 年と 2020 年の人口データを用いて川上地区の分析・推計を行っているが、これは国勢調査における地区の区割りが川上地区と一致したため行うことが出来たものである。他の地区では区割りが一致しないため、当節における地区別の分析・推計は国勢調査の人口データを用いても行えなかった。

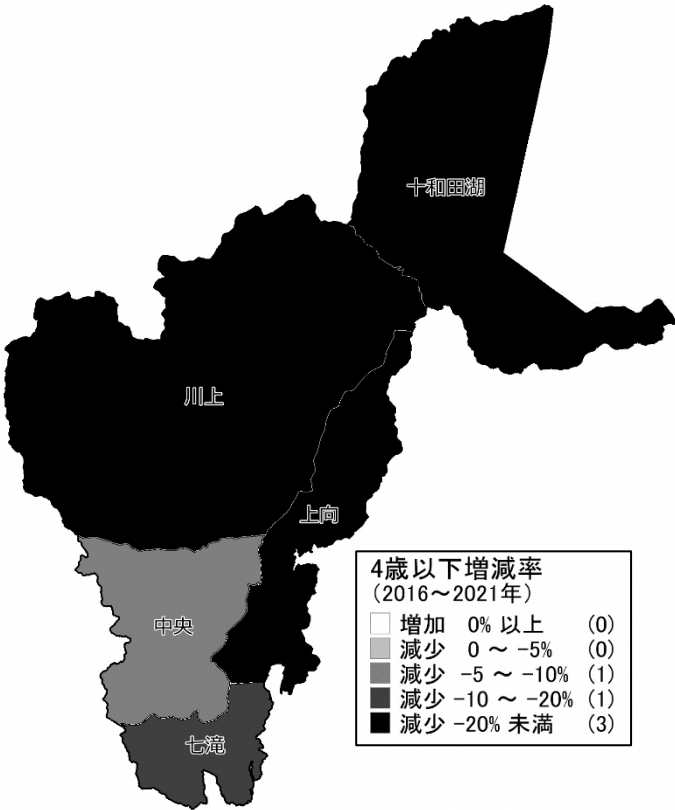
■人口増減率（2016～2021 年）



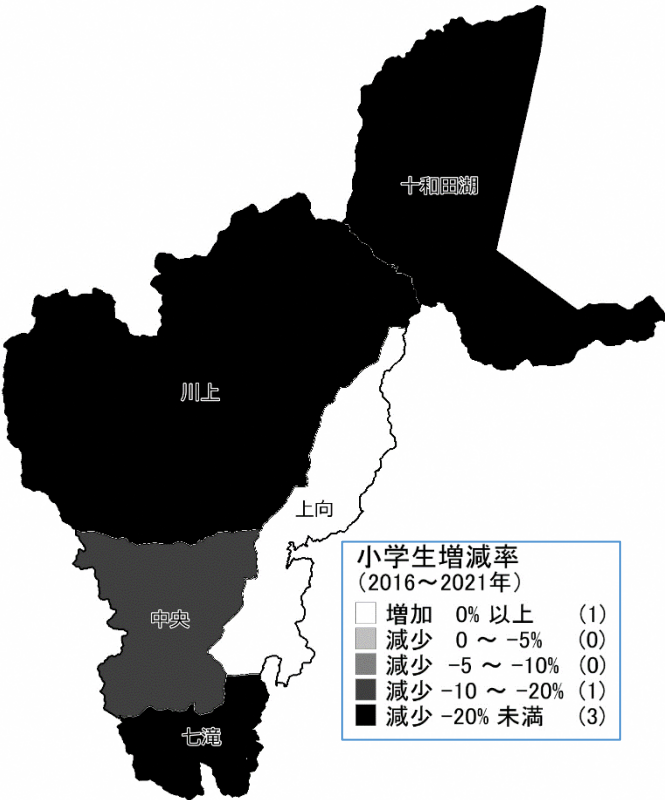
■高齢化率（2021 年）



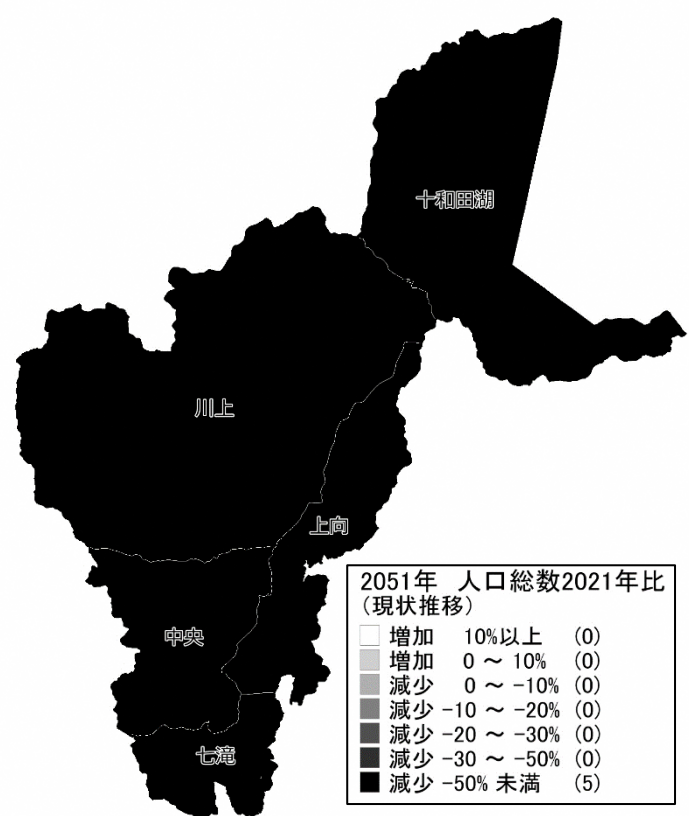
■ 4 歳以下増減率（2016～2021 年）



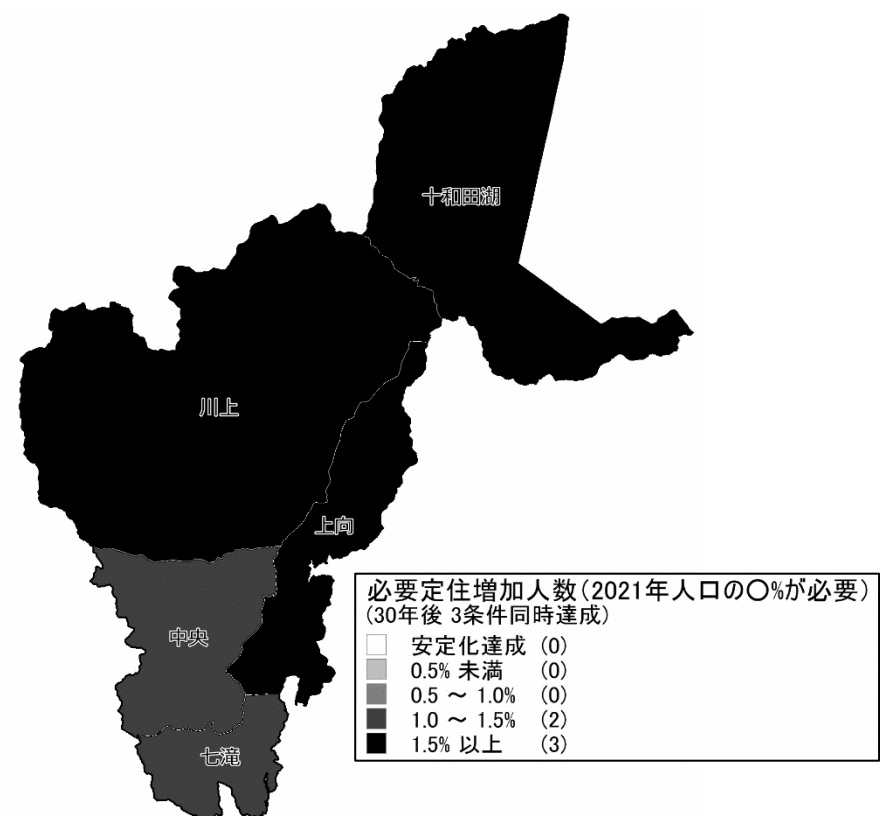
■ 小学生増減率（2016～2021 年）



■人口増減率予測（2021～2051 年）



■2051 年に人口安定化を達成するために必要な毎年の定住増加率（2021 年人口比％）



④ モデル地区（小坂町川上地区）の概要

小坂町は5地区から構成されており、そのうち川上地区をモデル地区として本事業を実施した。川上地区は町北部に位置し、4つの自治会から構成されている。人口417人、185世帯、高齢化率57.3%（2021年12月当時）という状況になっている。地区内の小学校は2002年に閉校し、現在は小学校と中学校が小坂町中心部に1つずつ存在する。川上地区の子どもは町営バス野口線を利用して通学している。

川上地区の第一次産業は農業を中心に、養豚業も盛んである。一見すると普通の農村地域であるが、隣接する鹿角市や青森県とは違い果樹栽培がほとんど見られない。それには歴史的な理由がある。小坂町全体に言えることでもあるが、川上地区は江戸時代末期から昭和後期に至るまで鉱山開発が盛んで、鉱山関係の仕事が身近にあった。結果として近隣市町村が辿った農業と出稼ぎを軸とした産業史とは異なる歴史を紡いできたのが川上地区なのである。今回の川上地区で行ったワークショップや、現地視察においてもその歴史を垣間見ることが出来た。

昔から首都圏を中心に全国から鉱山開発の関係で人が出入りしていたり、住民にも全国転勤の経験者が存在する。したがってヨソ者との交流機会は比較的多く、首都圏の子どもたちを受け入れる都市農村交流の歴史も長い。以前から社会教育に力を入れている地区でもあり、公民館を拠点とした取組への関心が高いことも伺えた。閉校した学校施設の活用も盛んで、地区内外の子どもたちのために夏場はプールを開放している。

その他、地区内の団体や組織に関してはヒアリング調査から作成した次頁の地元関係図にまとめたので参照いただきたい。



川上プール



川上七夕



川上公民館

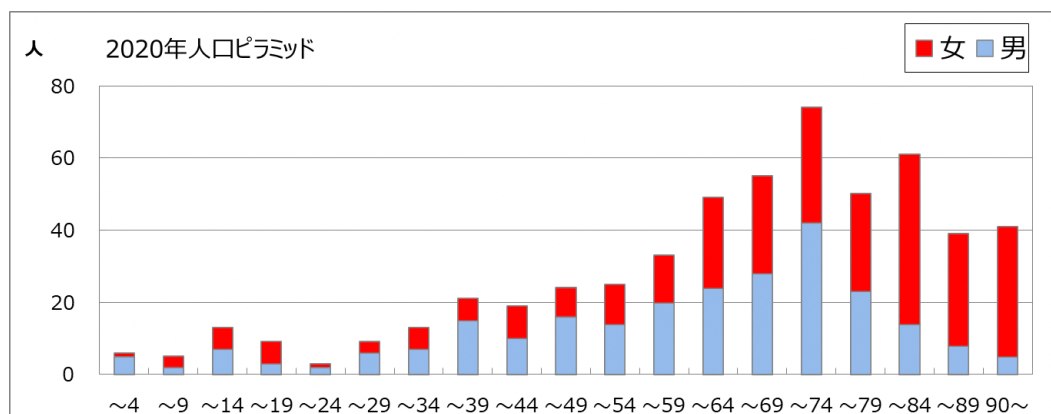
⑤ 人口分析・推計（小坂町川上地区）

小坂町全体での人口の現状分析、パターン別人口推計シミュレーションと同様の分析と検討を川上地区においても行った。なお、川上地区では住民基本台帳の人口データによる分析・推計に必要な5年前のデータが取得出来なかった。そのため川上地区については国勢調査の人口データ（2015年・2020年10月1日現在）を用いて分析・推計を行ったものを掲載する。

1）現状分析（2015～2020年）

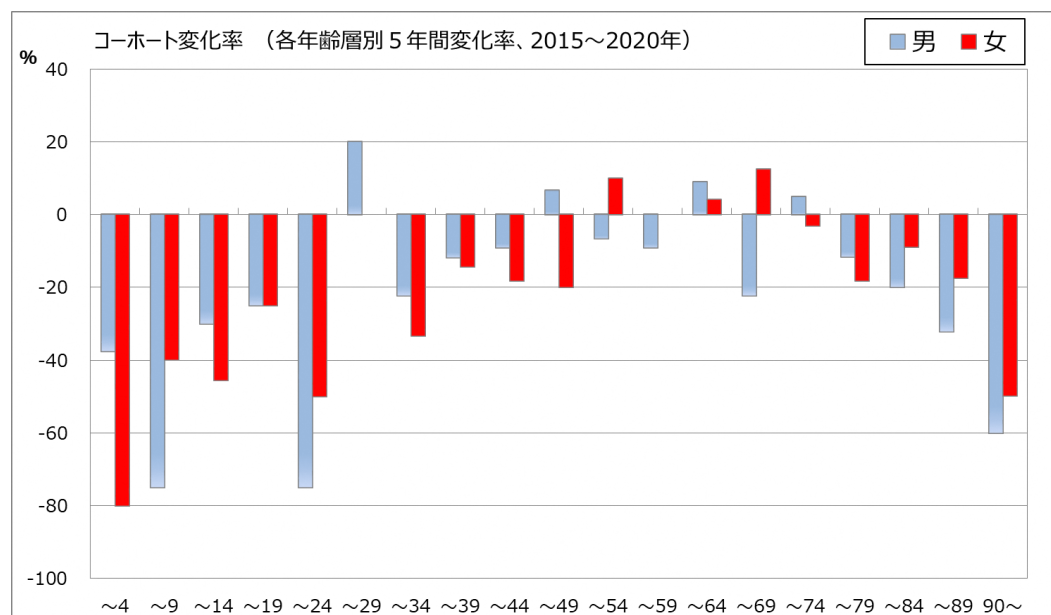
川上地区における人口構成、過去5年間（2015～2020年）の人口動態の推移を示す。

i. 年代別人口構成



地区住民549人の内、最多は70代前半の74人、最少は20代前半の3人となっています。20代前半に次いで一桁年代の人数も著しく少ない構成となっています。

ii. 年代別コーホート変化率



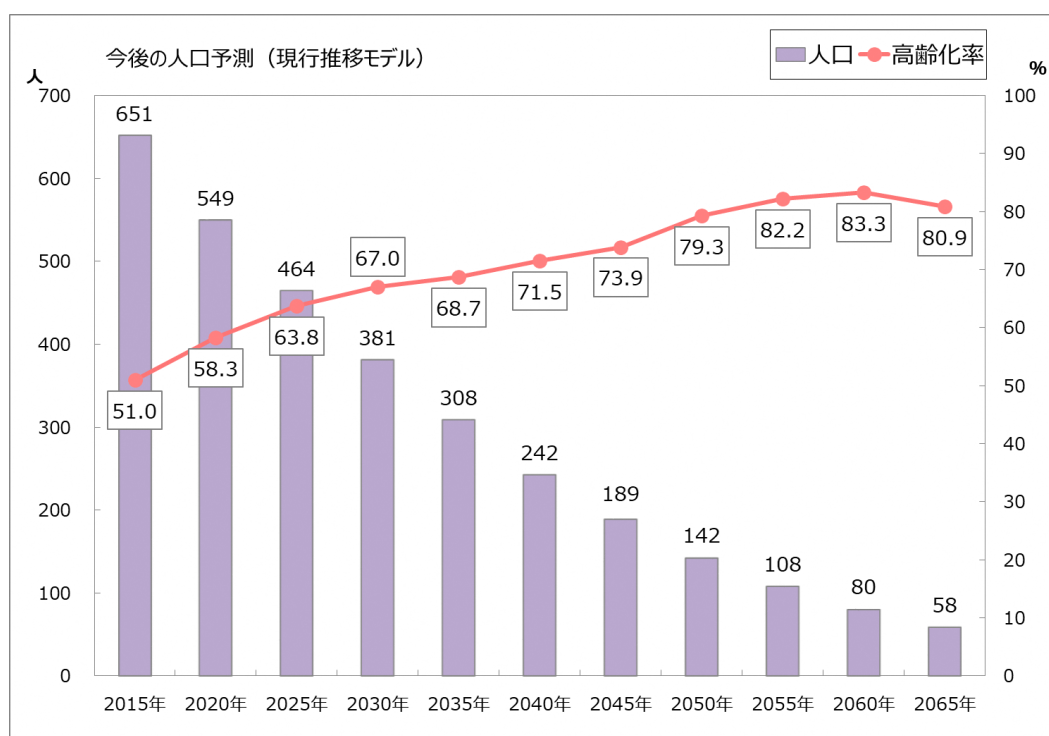
20代後半男性、40代後半男性、50代前半女性、60代前半男女、60代後半女性、70代

前半男性と高齢世代も含む比較的多くの年代で実数にして各 1～2 人の増加が見られる。しかし、20 代前半までの若い各年代層においては男女ともに 25～80%（実数で各 1～6 人）もの減少を示している。

2) 現状推移シナリオ

川上地区における過去 5 年間（2015～2020 年）の人口動態が今後も続いた場合の人口推移を検討していく。

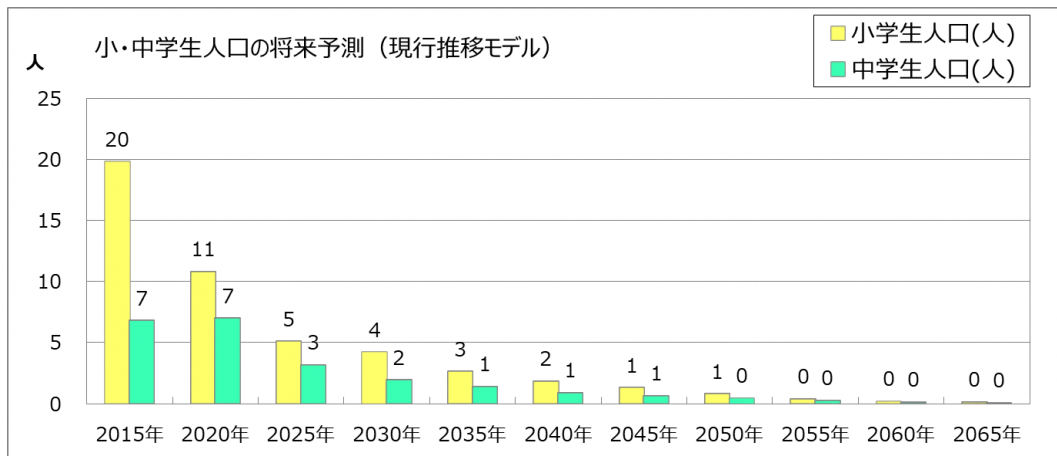
i. 人口と高齢化率予測



注：前頁「年代別コーホート変化率」に示したとおり、一部の年代層において極端な変化（減少）が見られ、この変化は恒常的なものではなく一時的な要因による可能性が排除出来ないため、より現実的な推計となるように補正を加えて（減少が緩やかになるように）分析した結果を掲載する。次頁に掲載した「小・中学生人口の将来予測（現行推移モデル）」、「2040 年人口ピラミッド予測（現行推移モデル）」も同様である。補正の算出方法については参考資料に掲載のとおり。

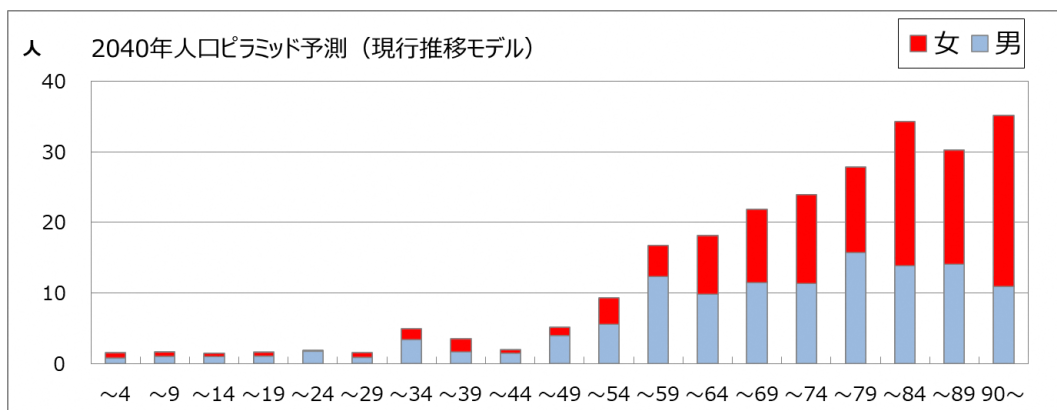
小坂町全体と比較しても人口の減少、高齢化率の高まりは急速に進むものと思われる。人口は 2020 年比で 20 年後の 2040 年には半減以上の 44.1 %、45 年後の 2065 年には 10.6%まで減少すると推計されている。

ii. 小・中学生数予測



小・中学生数も著しい減少となり、2020年比で20年後の2040年には16.7%、35年後の2055年以降は0人と推計されている。

iii. 2040年（20年後）の年代別人口構成



地区人口が241人と推計される内、ピークが80代前半（34人）や90代前半（35人）となり、40代以下の住民はどの年代層を見ても極めて少ない人口構成となることが予想されている。コミュニティ活動の継続は一層、困難になっていくものと懸念される。

3) 人口安定化シナリオ

小坂町全体での検討と同様に川上地区においても人口安定化シナリオを検討する。この検討には合計特殊出生率、10代後半の流出率、定住増加数の3つの要素を組み合わせる。

今回の組み合わせでは、出生率は2016年に策定された小坂町人口ビジョンの推計に準じて2040年には1.94、2045年以降は2.07へと段階的に上昇させる設定とした。10代後半の流出率は現状の半分となるように設定した（詳細は参考資料に記載）。10代後半の流出率を半分に抑制するという仮定は現実には多くの困難が予想される。しかしながら、この部分を具体的に検討する端緒となることを期待しこの設定とした。定住増加数の対象は20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代として毎年各1.8組、12.6人（川上地区の2020年人口の2.30%）の誘致数とした。以上の条件設定で、出生率、流

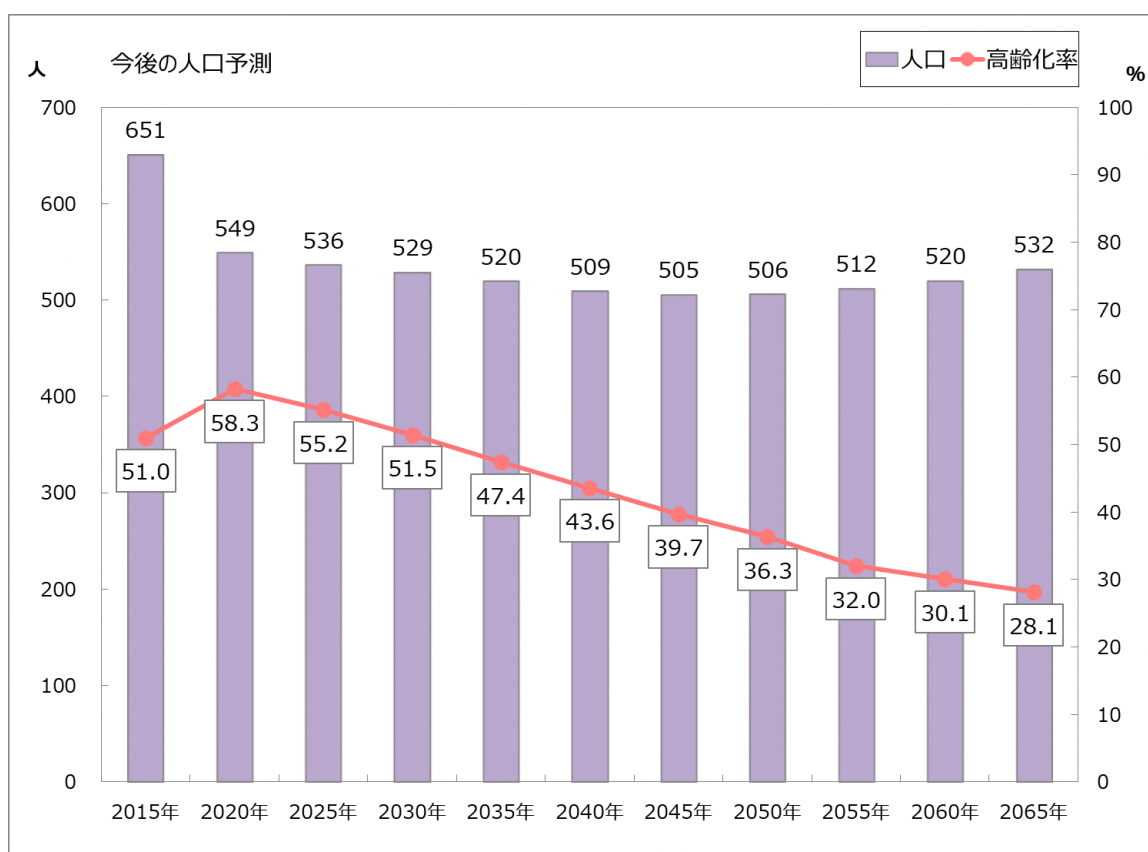
出率、定住増加数の3要素を組み合わせた人口安定化シナリオを検討する（下表参照）。

表 人口安定化シナリオの設定数値

合計特殊出生率（％）		10代後半流出率（％）		定住増加数・率/年	
2021～2026年	1.52	男性	現状	各世代（世帯）	1.8
2026～2031年	1.63		設定値	合計世帯数（世帯）	5.4
2031～2036年	1.73	女性	31	合計人数（人）	12.6
2036～2041年	1.83		50	2020年人口比（％）	2.30
2041～2046年	1.94		25		
2046年以降	2.07				

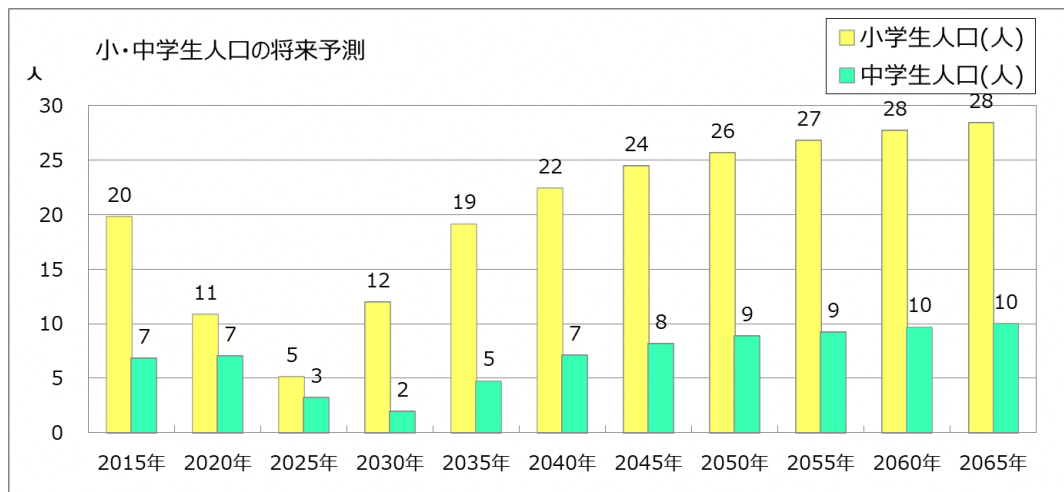
注：20代前半夫婦は1組（世帯）2人、30代前半子連れ夫婦は1組（世帯）3人、60代前半夫婦は1組（世帯）2人と設定。

i. 人口と高齢化予測



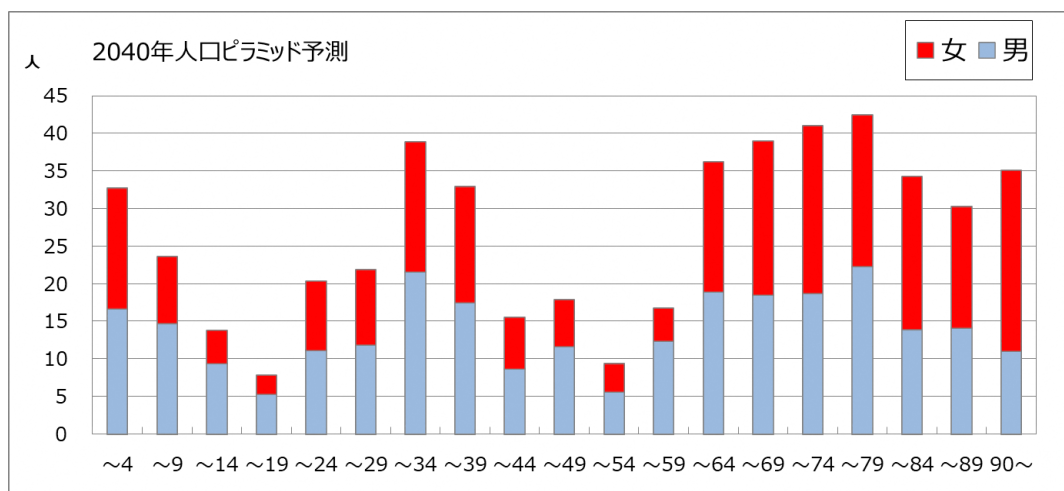
2020年人口の2.30％に相当する人数を毎年、呼び込むことが出来れば、人口総数、高齢化率とも、長期にわたり安定化が達成される。

ii. 小・中学生数予測



子育て夫婦や若者夫婦の継続的な定住が達成されれば小・中学生数は、2030年頃からは増加に転じ2035年には現在の小・中学生数の人数を上回る程度に回復すると推計される。

iii. 2040年（20年後）の年代別人口構成



一桁年代、30代、60代と世代ごとにピークが見られるようになり、徐々に安定的な人口構成になっていくものと予測される。

⑥ ワークショップ（１回目）（人口安定化ワークショップ）

１）目的

本業務の目的でもある具体的な定住促進策の検討には住民の参加が求められる。当ワークショップでは、住民の方々に地域の人口動態を再確認いただき、移住者がどのくらい増えれば地域の人口はどのように変化するのか具体的にシミュレーションいただいた。その上で目標とすべき移住者誘致数や地域人口の安定化を検討することを目的として行った。

２）開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2021 年 11 月 6 日（土）13：30－15：30
- ・場所 川上公民館
- ・参加者 地域住民（21 名）、小坂町職員、秋田県職員等 A～D の 4 班

■実施・作業内容

- ・一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所の野口氏による当日の作業内容等の概要説明
- ・人口動態の増減要因分析として自らの地区の 2016 年から 2021 年の各年代、男女別の人口動態（コーホート変化率等¹）を確認し、増減要因を分析
- ・人口推計シミュレーションプログラムを実際に体験し、人口安定化に向けた具体的な移住者数（人口安定化シナリオ）の検討

■当日の様子



３）人口動態の増減要因分析

この作業では参加者に対して川上地区の年代別人口構成のグラフを提示しながら、各年代の増減要因を検討いただいた。各班の検討結果の要約・抜粋が次頁表である。

¹ この時点では国勢調査による川上地区の推計に必要な人口データが未公表であったため、小坂町の住民基本台帳 2016・2021 年 4 月 30 日現在のデータを用いて算出された小坂町全体としての変化率を川上地区単位として取得出来た住民基本台帳 2018・2021 年 4 月 30 日現在の人口データに代替し川上地区の人口推計を行った。ワークショップ（１回目）ではその推計結果を使用し作業した。

表 川上地区における人口増減要因分析結果の要約・抜粋

年齢	人口増加要因	人口減少要因
0～4		親と街部の方に移住する
5～9	第3次ベビーブーム世代の多さが影響している	親と街部の方に移住する
10～14	35～44歳代の親世代も多いことにより、この年代の子どもも多い	
15～19	子どもが2～3人の兄弟が多い（一人っ子は少ない）	
20～24		
25～29		子どもをつれて便利な街部へ引っ越した
30～34	地元出身者が結婚して戻って来た（嫁や婿を連れて来た）	子どもをつれて便利な街部へ引っ越した
35～39	（女性）離婚して戻って来る人が多い	街部へ引っ越し
40～44		街部へ引っ越し 子どもの高校進学を機に大館へ
45～49		戻って来たが、また出て行った 子どもの高校進学を機に大館へ
50～54		
55～59		嫁になって転出した人が多い年代
60～64	親の介護 定年退職して戻って来る	
65～	親の介護 定年退職して戻って来る	～74歳は集団就職 76～79歳は鉱山閉山後、移住（長男は残った）

この表から読み取れることとして、まず20代後半～30代の若い家族が、小さな子どもと共に市街地に流出していることが分かる。30代の人口増加要因の特徴としては、結婚や離婚に伴うUターンが挙げられる。40代になると子どもの高校進学に伴って、隣接する大館市に転出するケースが多い。「家の事情（介護等）」をきっかけに戻ってくる人は60代以上に多く見られる。全国的にはその傾向は40代以上から見られるが、川上地区の場合は違った傾向となっている。

70代後半の男性が極端に少ない要因としては、鉱山閉山後に仕事を求めて移住した人が多かったことが挙げられる。

4) 人口安定化のシナリオづくり

次に人口推計シミュレーションプログラムを使用し20代前半夫婦、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の3世代の目標誘致数を検討いただいた。その際に用いたプログラムは小坂町全体の変化率を用いた代替のプログラムであったため前節「⑤人口分析・推計（小

坂町川上地区)」で掲載した図と推計結果が異なっている。実際にワークショップでは参加者がどのような推計結果を見て検討材料としていたかを確認するため「人口と高齢化率予測」と「小・中学生数予測」について次に掲載した。

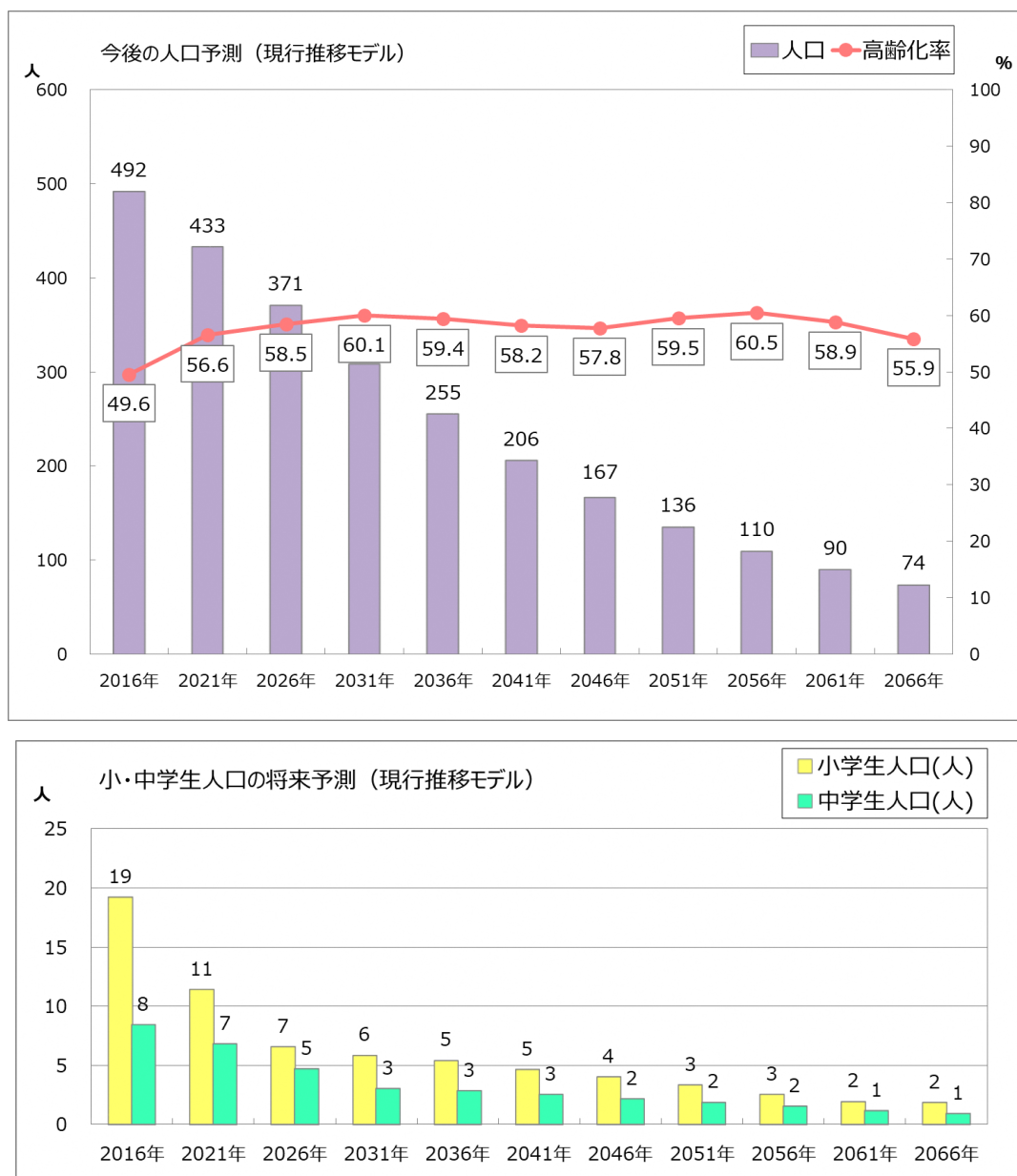


図 ワークショップ使用版の人口と高齢化率予測（上）と小・中学生数予測（下）

川上地区の国勢調査の人口データに基づいて推計・分析した前節掲載の図に比べ、緩やかな人口減少・高齢化率の上昇となっている。参加された住民の方々にはこのような図を見ていただきながら、現実的に達成したい現実版の目標と、可能ならばこれくらい来て欲しいという理想版の目標を立てていただいた（次頁表参照）。なお10代後半流出率抑制目標については代替した小坂町全体の現在の数値である男性31%、女性34%をそのまま目標とすべき数値として設定した。合計特殊出生率については現在の小坂町全体の数値である1.47から2046年までに1.80へ上昇するよう設定した。人口安定化をより身近に感じて

いただくために、この流出率抑制目標と合計特殊出生率は「⑤－３）人口安定化シナリオ」で設定した数値よりも緩やかな数値目標とした。

表 川上地区における検討された人口安定化シナリオ

班		A	B	C	D	単位
項目						
誘致世帯数・人数/年 目標						組
20代前半夫婦	現実版	0.25	1	0.25	0	
	理想版	0.5	0.5	1	0.5	
30代前半子連れ夫婦	現実版	0.1	0.25	0.25	0.25	
	理想版	0.2	2	1.5	1.5	
60代前半夫婦	現実版	0.1	0.25	1	0.2	
	理想版	0.1	0.5	0.5	1	
合計人数	現実版	1	3.25	3.25	1.15	
	理想版	1.8	8	7.5	7.5	

各班でシミュレーションした結果、様々な組み合わせが検討された。現実版の検討では20代前半夫婦や30代前半子連れ夫婦の誘致は、「4年に1組であれば」という意見が多かった。理想版では、全体的に30代前半子連れ夫婦への期待値が高く表れた。具体的な人口安定化シナリオについては、子育て世代の女性で構成されたD班の現実版の検討結果を紹介する。まさに「30代前半子連れ夫婦を4年に1組」の誘致をベースにしたものとなっている。小中学生の子ども数は2026年までは減少するが、それ以降は10名程度に安定していく。D班は子育て世代を中心とした女性グループでもあり、地域の現実に基づいたシビアな検討結果となった。

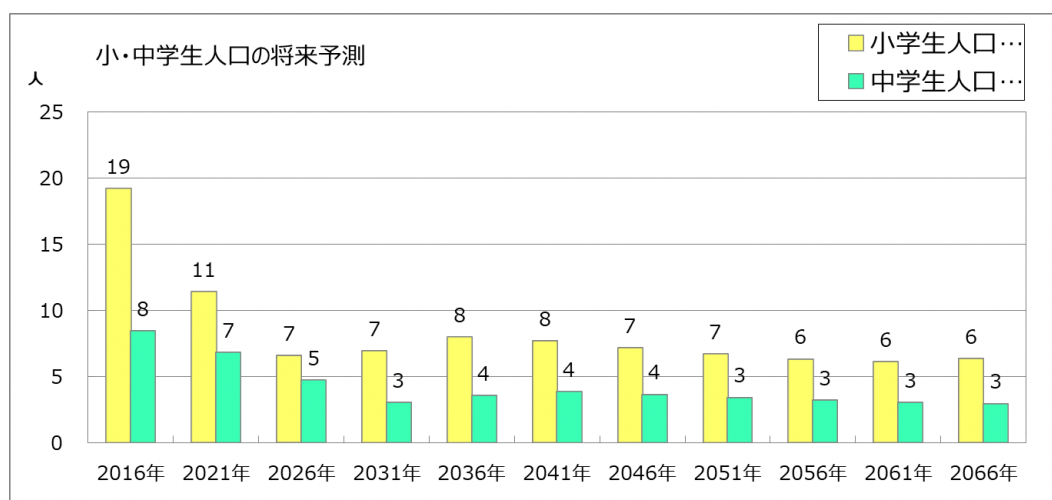
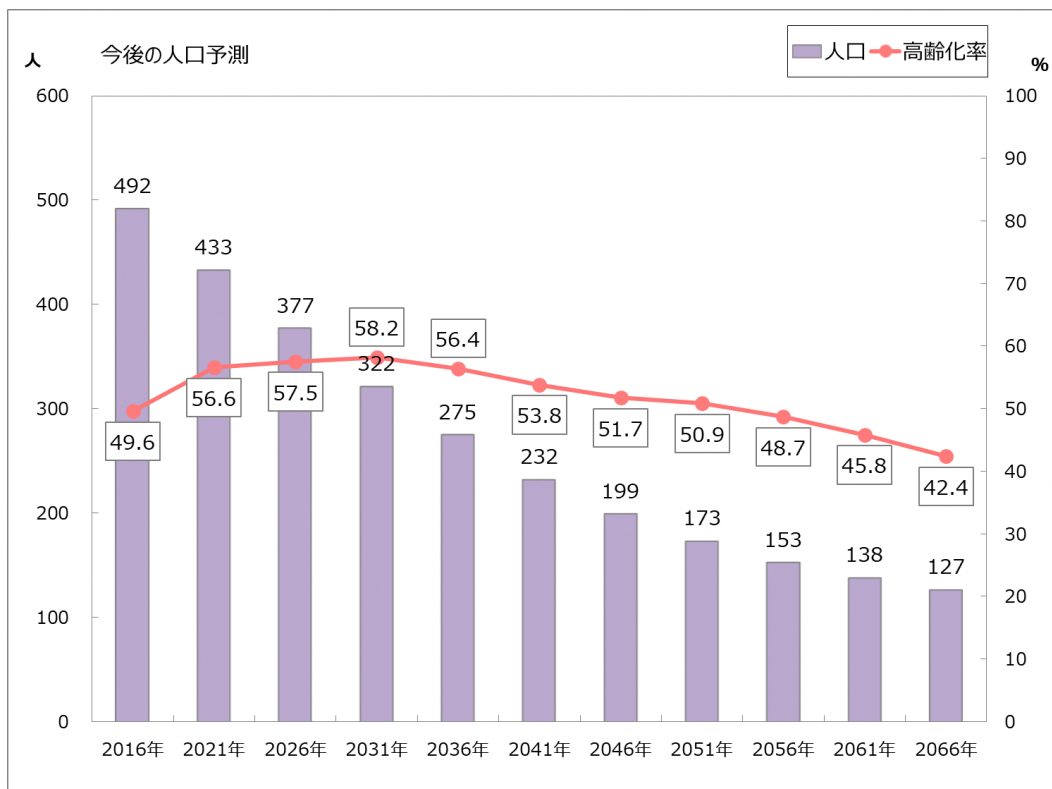


図 川上地区 D 班現実版の検討結果 人口と高齢化予測（上）と小・中学生数予測（下）

5) まとめ

本ワークショップでは参加された住民の方々に対して、川上地区の人口動態を確認する機会を提供した。人口増減の要因分析においては多角的な視点から意見が飛び交い、どうすれば移住・定住につながっていくかの議論が活発に行われた。川上地区としては若い家族の移住・定住が重要課題であることが全体で確認され、ワークショップ（2回目）に期待が持てる雰囲気となった。

⑦ ワークショップ（２回目）（地元天気図ワークショップ）

1) 目的

ワークショップ（１回目）を受けて、このワークショップでは地元関係図を基に地域の現状と定住促進を可能とする将来像について検討を行った。地域の行動計画（グラウンドデザイン）策定の一助、あるいは地域の拠点づくりや実際に移住者を呼び込むという動きを生み出す端緒となることを念頭に置いている。実施地域における今後の検討材料として活用いただきたい。

2) 開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2021 年 12 月 5 日（日）13：30－15：30
- ・場所 川上公民館
- ・参加者 地域住民（18 名）、小坂町職員、秋田県職員等 A～D の 4 班

■実施・作業内容

- ・一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所の野口氏による当日の作業内容等の概要説明
- ・地元天気図ワークショップとして前半（課題編）と後半（解決編）の地元天気図の作成と地域の定住促進策の検討（テーマは 30 代女性が定住するとしたら）
前半は地域の現状や課題を確認するため、施設、組織等について強みや弱み、関係性を検討し現時点での地元天気図を作成
後半は前半で確認した地元天気図にどのような要素が加われば、30 代女性が移住・定住しやすくなるのかを検討し将来展望を加味した地元天気図を作成

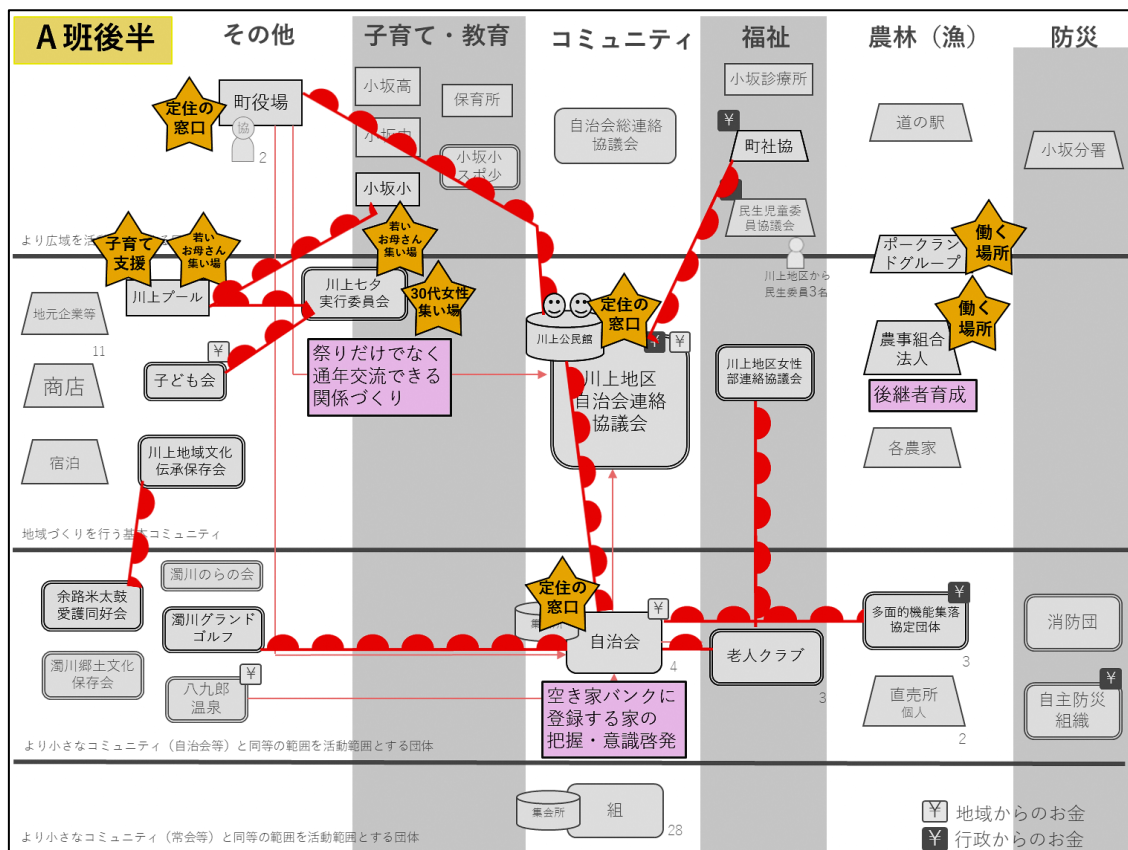
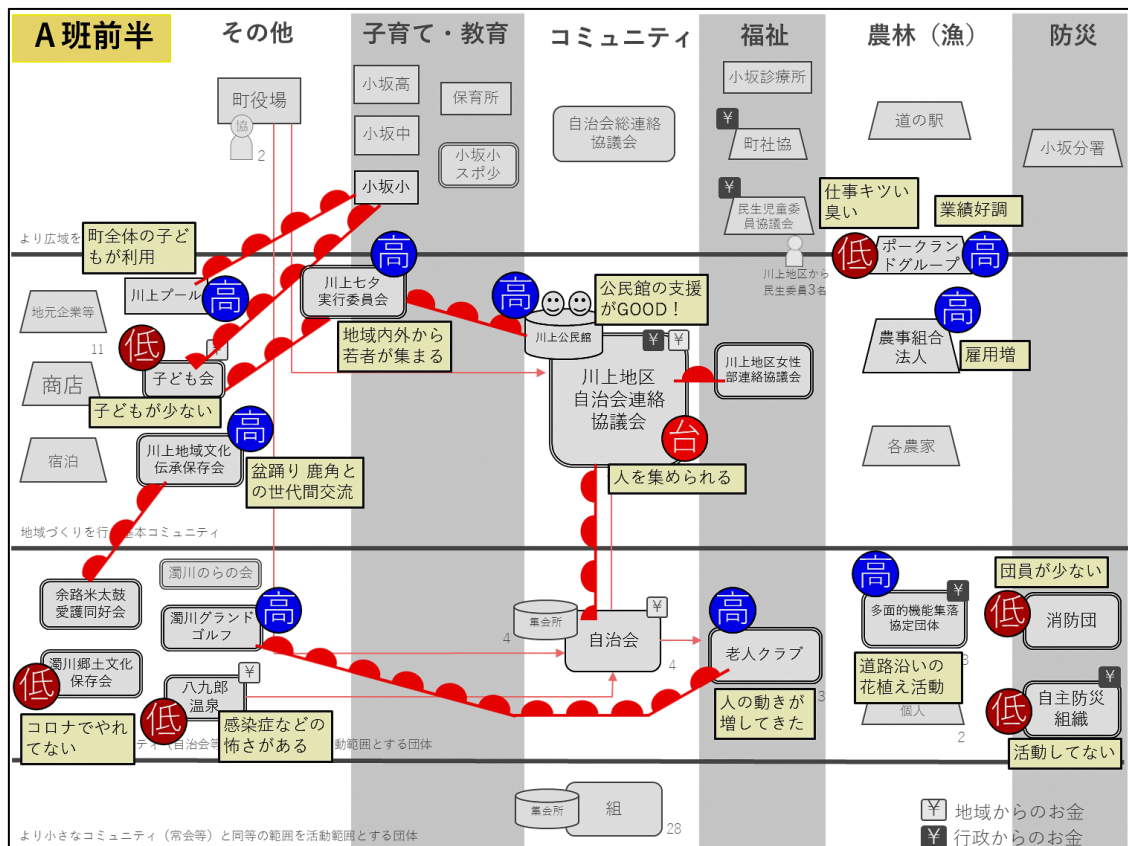
■当日の様子



3) 検討結果

川上地区では 4 班構成で作業が行われた。その中で例として主たるメンバーが 60 代の男性であった A 班と、30～40 代の女性が大半だった D 班の検討結果を表示する（「④モデル地区（小坂町川上地区）の概要」に掲載した地元関係図と併せてご覧いただきたい）。

A 班の地元天気図（上半・下半）



[illegible]

4) まとめ

地元天気図を提示したA班とD班について概略を記載したい。

A班は60代を中心とした男性グループで、前半の検討では、川上地区自治会連絡協議会を台風の目として位置付け、その拠点となる川上公民館も地域の強みであるという声が挙げられた。A班の世代は社会教育に熱心に取組んだ世代でもあることから、地域の自治活動の重要性を強く認識しており、既存の諸団体に価値を見出していた。そのことから、人口減少に伴うそれらの団体の衰退に対しても問題意識が高い様子であった。

後半では、小坂町唯一の小坂小学校との連携強化がまず重要だという声が多く挙げられた。自分が住む地区だけに限定した取組ではなく、地区外にも目を向けていこうとする意識の高さは若年層に多い傾向でもあるが、川上地区においては高齢の男性層にもそれが見受けられた。そして、川上公民館と4自治会の連携を通し、空き家バンク登録やその啓発を推進していきたいという声が挙げられた。地区内の農業法人については、後継者育成も視野に入れた運営を期待していた。

一方、D班は30～40代を中心とした女性のグループで、前半の検討では川上公民館が台風の目として位置付けられ、特に子ども会の重要性を再確認していた。子育て世代でもあることから、子どもを軸とした意見交換が展開され、少子化に伴う諸団体の衰退に不安を感じていた。男性中心に構成されている消防団や自主防災組織においては、女性の参画が課題だという声が挙げられた。

後半では、今以上に子どもや子育て層が魅力的に感じる地域にしていきたいという意見が多く出された。具体的には公民館を拠点とした朝市やフリーマーケット、子ども食堂が挙げられた。どれも自分達が楽しめる企画となっており、D班の主体性の高さが伺えた。子育て世代が公民館を拠点としたアイデアを多く出せるという事実は、川上地区に社会教育が浸透していることの裏付けでもあろう。

B班・C班においても、公民館を拠点とした取組アイデアが多く出された。繰り返しとなるが、川上地区が長年取組んできた社会教育の成果が、今回のワークショップにも反映されたことを強く感じた。

B班については、川上地区に特化した地域おこし協力隊と集落支援員の配置が強調され、それらの人材を活かした空き家整備がアイデアとして出された。特に集落支援員の活用においては、川上地区に直接的な配属を求める声が挙げられた。C班については、公民館前でのスケートボード場等、小さい子どもから楽しめる遊具の設置や、首都圏の子どもを対象にした農業体験等が挙げられた。C班はデマンドタクシーの設置を求めた唯一の班でもあり、その対象者は高齢者に限らず子どもの利用も意識したものであった。

⑧ 小坂町報告会の開催概要

1) 目的

コミュニティ生活圏形成事業の概要と川上地区での取組の成果を基に、手法や手応えを小坂町全体に発信・共有する目的で行われた²。

2) 開催概要

■日時/場所/参加者

- ・日時 2022 年 1 月 15 日（土）13：30－15：30
- ・場所 小坂町交流センター セパーム
- ・参加 69 名

■次第

第一部 講演 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所 所長 藤山 浩 氏
2020 年代は田園回帰の時代

～小坂町の地区別人口予測の概要と全国的な先進事例の紹介～

第二部 パネルディスカッション

コミュニティ生活圏の形成に向けて

～今こそ定住と暮らしの土俵をつくる！～

コーディネーター 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所
所長 藤山 浩 氏

(1) 川上地区からの取組報告

報告者 川上地区 木村 久 氏
川上地区 秋本 裕子 氏

(2) パネルディスカッション

次世代の定住増加への課題や手法、そして地元での暮らしを支える仕組み等について

テーマ1 次世代の定住増加の一番課題となっていること

テーマ2 次世代の定住増加に向けて一番力を入れたいこと

テーマ3 集落内外の団体や、子育て、福祉、農林分野などをつないでこ
んな仕組みをつくりたい

ま と め 今後に向けての抱負を漢字一文字で

川上地区 木村 久 氏

川上地区 秋本 裕子 氏

小坂町 地域おこし協力隊 緒方 瑛 氏

小坂町総務課 本田 裕平 氏

コメンテーター 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所
特別研究員 野口 拓郎 氏

² 新型コロナウイルス感染症拡大を防止するため、県外在住の藤山氏と野口氏はリモートで参加いただくオンライン形式で開催した。本報告会では Zoom ビデオコミュニケーションズより提供される web 会議サービス Zoom を使用した。

■当日の様子



3) 内容紹介

本報告会では一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所所長 藤山浩 氏より本事業に関連して「2020 年代は田園回帰の時代」という演題で講演いただいた。その後、ワークショップ参加者に成果を発表いただいた。パネルディスカッションでは地元住民等、4 名の方々と業務を担当した野口氏に参加いただき与えられたテーマに対してキーワードを回答し、その意味するところを説明いただく形式で執り行った。このパネルディスカッションの内容について抜粋し要約する。

テーマ1 次世代の定住増加の一番課題となっていること

■木村氏キーワード 「寛容性」

ヨソ者が入った時の地域の寛容性が問われる時代。特に若い女性に対しての人生観や結婚観の押し付けは良くない。女性が心地良く暮らせる雰囲気づくりが大事。

■野口氏キーワード 「市街地への一極集中」

教育機関が市街地に集約されていることも影響してか、若い世代の市街地への一曲集中が目立つ。しかし、全国に目を向けてみると子育て世代が郊外に価値を見出しているケースも多い。

テーマ2 次世代の定住増加に向けて一番力を入れたいこと

■秋本氏キーワード 「ホッと出来る場所」

幅広い世代が安心出来る交流拠点が必要。特に若いお母さん世代は基本的にヨソ者となるため、その必要性を強く感じる。公民館拠点で頑張りたい。

■本田氏キーワード 「空き家対策」

住む場所を確保出来ないと移住者を呼び込めない。空き家は多くあるが、活用が進んでいない。空き家の活用は移住促進の第一歩として重要な取組となる。

テーマ3 集落内外の団体や、子育て、福祉、農林分野などをつないでこんな仕組みをつくりたい

■緒方氏キーワード 「首都圏拠点のワイン販売」

小坂ワインに携わる協力隊員としても、ワイン産業を盛り上げていき、小坂町での雇用創出を生み出したい。地域循環も大事だが、東京からも経済を呼び込むことが重要だと考える。

まとめ 今後に向けての抱負を漢字一文字で

■木村氏キーワード 「語」

世代間の交流をする場が欲しいという 30 代女性の声をいただく機会があった。

老若男女問わずの語らいの場が改めて必要だと強く感じている。

⑨ まとめ（成果と委託機関による方向性の提示）

川上地区は秋田県でも北部に位置し、青森県に隣接した集落である。江戸時代末期から現在に至るまで鉱山開発が盛んで、かつては人口も多く賑わいを見せていたが、鉱山開発の規模縮小等も影響してか、現在は人口減少と高齢化に歯止めがかかっていない。2002 年には川上地区を校区とした川上小学校が閉校となり、市街地に教育機関が集約されてしまった。

しかし、戦後から社会教育が熱心に取り組まれていたこともあり、住民の自治意識の高さが特徴的となっており、地域のため、子どものためを考えた取組が盛んに行われている。農山村の 60 代男性のステレオタイプといえは保守的なイメージがあると思われるが、小坂町報告会に登壇された木村氏の発言からも伺えるように、川上地区の自治会長等は女性や子どもを思いやる意識が高いと感じた。計 2 回のワークショップにおいて、女性や子どもの立場に置き換えた発言が多かったことが印象として残っている。

移住促進が順調な地域をいくつか観察すると、その共通点として社会教育の積み重ねが挙げられる。ヨソ者や異なる世代への配慮や思いやりの意識が高いことが、結果としてその地域の移住定住につながっている。その点で、川上地区は大きな可能性を秘めた地域だというのが分かる。ヨソ者や若者と昔からの地元住民ではあらゆる価値観が異なっているケースも多く、その価値観対立によって相互に不信感が生まれてしまう。つまり、異なる価値観に対して寛容性が高い地域においては、ヨソ者や若者は安心して暮らすことが出来るのである。異なる価値観に向き合い、お互いが尊重し合うことを根幹とした社会教育の積み重ねは、移住促進の土台形成にもつながっていく。

全国的には田園回帰現象が各地で起きているが、日本海側の東北地方ではその現象はあまり起きていない。したがって、小坂町に限らず秋田県や青森県津軽地方等においては移住定住の好事例が乏しい。しかし、川上地区は繰り返し述べてきたとおり、良い意味で特殊性が強い。今こそ全国に視野を広げ、住民が主体となった移住定住の取組事例を学び、試行錯誤を繰り返していく時ではないだろうか。行政としてはそのサポートが出来たら良いだろう。事例を学ぶ機会を多く提供出来れば、川上地区は自走出来るはずだ。

ワークショップで一番多く挙げた「公民館を拠点とした取組アイデア」は、全国の移住先進地では、小規模多機能自治³の一環で割と当たり前に行われているが、北東北におい

³ 小規模ながらも、様々な機能を持つ住民自治の仕組み。概ね小学校区域において、目的型組織や地縁型組織等の様々な団体が結集し、自ら課題解決し地域運営を行う。公民館等拠点施設も有する。

では実践事例が乏しく、住民としてもなかなかその必要性を感じ取れていないのが現状だ。公民館と移住定住を上手く関連づけられていないのだ。しかし、川上地区はこの度の事業で住民自らその必要性を感じ、今後の重点課題として掲げることが出来た。これは本当に大きな成果だと思う。

最後に、公民館を拠点としたアイデアを実現するための提案をしたい。まずは木村氏のような川上地区に精通し、ヨソ者や女性に対して寛容な精神を持つ住民を2名程度集落支援員として公民館に迎え入れて欲しい。年配の男性に限らず、子育て世代の女性も加わっているとカバー出来る領域はより広がるだろう。実際に30～40代女性による集落支援員の割合は全国的に多い。

支援員の主な業務は今回挙げたアイデアの実現で良いはずだ。「女性向けサロンの運営補助」、「公民館前・朝市の企画運営」、「協力隊希望者に対する現地見学会の実施」等は早い段階で取組めるだろう。ちなみに川上公民館はWi-Fiも備わっていることから、オンラインツールを駆使した会議やイベント実施も可能であることから、コロナ対策も取りやすい。

地域おこし協力隊と集落支援員を対象にした全国研修が年2～3回実施されているが、是非ともその研修にも参加して欲しい。小規模多機能自治のサポートを業務とした協力隊や支援員が参加している可能性は高く、全国の事例を知れる良い機会となる。

地域から出たアイデアを実現させるコーディネーター的役割を担い、全国の事例収集と人脈づくりを専業に出来るのが集落支援員だと思う。その活動の延長線上に小規模多機能自治がある。そのロールモデルとしては青森県中泊町が挙げられる。川上地区での集落支援員活用を前向きに検討していただきたいと願う。